

常なる磐

つねなる いわ

令和3年2月12日(金)

その2

◇ 【検討中】 来年度からの部活動に関わる対応について①

現在は「陸上・水泳部」として活動している本校の部活動を紐解いてみた。

現在の方針で活動に至るまでの転換期は2度ある。

初めは平成26年度(6年前)、夏の大会をもって男子ソフトボール部が廃部。続いて平成28年度(4年前)に、夏の大会を境に女子バレーボール部が廃部となり、現在に至る。

この背景には、部活動運営の柱となる「児童数」がある。

児童数は、平成9年度の149名から右肩下がりで減少し、6年後の平成15年度は101名、さらに5年後の平成20年度には58名と、およそ10年で1/3となる。この傾向は続き、平成27年度には50名を割り、それ以降、本年度までの間、45名~49名で推移している。廃部検討にはもちろん反対の声も少なくなかったようであるが、こうした実態を分析するに、当時の決断は妥当であったとの見解が下せる。

対して、今後6年間(令和3年~8年度)の児童数は、来年度の49人の最多を境に減少し、令和7年度からは30人台に入っていく、この状況が続くと予想される。幸いなことに、令和8年度まではどの学年も複式学級は避けられる見込みで、各学級に学級担任を配置してきめ細かな教育を展開できるものの、学校は諸活動運営に際し、時代に即した、タイムリーかつ適切な対応を図る必要に迫られている。その第一が部活動である。

では、来年度以降の「部活動運営の考え方」について、具体的に述べていく。

基本的に「陸上・水泳部」の形はそのまま残す。

特化するのではなく、複数の競技を経験させることは、小学生時期の子供たちの体力向上の観点からとてもよいことである。

よって、転換する点は【実施方法】となる。

まずは、「陸上」と「水泳」の運動特性について分析していく。

「陸上」は、競走種目だけではなく、跳躍、そして投てき、各種リレーと幅広い種目がある。走ることに特化しても、短距離と長距離、そして競歩、ハードル走など、やはり幅広い。「ハードル走」では、短距離では全く歯が立たなかった者が、ハードル越えのこつさえつかめば、肩を並べるところか優位に立てることすらある。短距離走では、小学生に負けてしまうマラソン選手もいる。私も走るのは全く得意ではないが、ソフトボール投げやハンドボール投げは自信があった。

つまり、「陸上」は「体力や体動に適した種目に出合わせれば何とかなるし、子供に目標や希望をもたせやすい競技」ともいえる。

対して「水泳」はニュアンスが異なる。

得意と不得手に二分化・二極化される。

他はダメだが、平泳ぎだけなら何とか…というのは聞いたことがあるが、平泳ぎと背泳ぎ、バタフライは抜群だが、クロールだけはからっきし…なんていうのはあまり聞いたことがない。

水中での体の保持（水に浮く）の感覚習得が全ての鍵を握る水泳だけに、これができないと本当にやっけていて苦しい。これが、いわゆる「カナヅチ」である。

さらに不得手な者には、恐怖心が加わるから厄介だ。不得手に拍車をかける。

その点、授業の水泳には特性を配慮した工夫がある。個々に目標をもたせ、ゲーム要素を盛り込むなどして楽しみを失わせないように指導している。学校のプールもいい。不得手な子供を考慮した短水路であり、段差も付いている。

それから、昔あった「25mを泳げない者は赤帽」のような、見て識別するマイナールールがなくなったのもいいことだ。泳げない子を判別して安全確保なんてとんでもない。本人からすれば、恥ずかしくて、たまったもんではない。

あくまでも解釈は私見。よって、水泳を根本から否定しているわけではない。私の体験と記憶なのだ。

さて、本校の児童は、大中規模校のように部活動を選択できない。水泳と陸上が大好きならまだしも、両方とも苦手な子供への配慮が大切となる。運動が苦手な子供を救う方法は、練習・大会出場とも、気持ちよく取り組ませることである。

部員数が少ないと、運動の得手、不得手にかかわらず学校代表として大会に出場しなければならない場合も生じる。これがマイナス経験にもなりうる。

やはり、配慮が必要だ。公の恥は一生の心の傷となる。

<②に続く>